
ごめんねのその先を

香坂 奈桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごめんねのその先を

【Nコード】

N 8 1 2 1 A

【作者名】

香坂 奈桜

【あらすじ】

一世一代の告白をしたが、あっけなくフラれてしまった女の子のお話。終わりに始まるものがあってもいいかもしれない。教えてよ、ごめんねのその先を。

初めから知っていたんだ。
優しい声、優しい眼差し。

心地良いそれが、私だけに向けられたものじゃないってこと。

「ごめんね」
わかってる。

「水野さんのことは、そんな風には見れないんだ。本当に」
わかってたんだよ。

「ごめんね」
わかってるから。だから、そんな虚しい言葉を繰り返さないで。謝
って欲しかったんじゃないの。一世一代の告白で、好きな人に困っ
た顔をされてしまうなんて。これ以上に最悪な告白がどこにあるん
だろうか。

期待なんて最初からしていなかった。
学園内で1、2を争う人気者の藤崎くんと。平凡で、どちらかと言
えば地味。そんな私に、彼が恋してくれる可能性は、皆無だった。

期待していた綺麗なフラれ方をしていたら、こんな悲しまなかったかもしれない。もっと良い断わり方もあったんじゃないのか。告白してスッキリ諦める。片想いの最善の忘れ方をする筈だったのに。スッキリどころか、逆にもやもやとした疑念が残ってしまった。

あんな、使い古された安っぽいドラマのような、心ない台詞を言うなんて。

だって私は、数日前にも同じ台詞を言う藤崎くんを、たまたま見てしまったのだから。

みんなに同じ台詞を言い、みんなに同じ笑顔を向ける。藤崎くんには、好きな女の子なんていないんだろうな。多分、私の憶測は当たってる。

彼の前で涙を流さなかったこと、誰か褒めてよ。

どこをどう走ったのか、覚えている訳がない。だけど、誰とも接触することなく、教室に戻って来れた。告白の場所に使った人通りの少ない渡り廊下は、俯いて走るのに最適だったのかもしれない。

「水野さん？」

落ち着いた低い声に、はっとする。

振り向いてみると、クラスメイトの筒井くんだった。筒井くんはサッカー部でゴールキーパー、という肩書きしか知らない程度で、話したことは勿論なかった。サッカー部員らしい、ガッチリとした体なのに、笑顔が可愛い子犬みたいな人。私たち女子の中では、そんなイメージだ。子犬というのは彼の持つ雰囲気のこと、顔が幼いとかいう訳ではない。顔は所謂甘いマスクってやつだろう。他校生に告白されている現場を何度か見た。

考えることで、私は少しでも平常心を取り戻した。筒井くんが居心地悪そうにして立っているのは、一列目の廊下側の席だった。入ってきたときも、そこだけ鞆があったように思う。

あまり記憶にないが、あそこは筒井くんの席だろう。私がいるのは自分の席。一列目、窓際の席だ。私と筒井くんとの間に5人も入るので、知らなくても不思議ではない。

「泣いてるの？」

泣いてる？

さっきから、訳知り顔の筒井くんにかが引つ掛かる。この距離では、表情も分からないのが普通なのに？

「あの、ごめん、俺……たまたま通りかかって、見……」
また、『ごめん』。そのひとことに、何故か腹が立った。

申し訳なさそうな顔。だけど、その裏に見えた同情の色。気付いたときには、手に持っていたものを投げつけた。

それが思ったより凄いい音がしたのを知ったのは、廊下に一歩踏み出

したとき。だけど私は振り返ることもせず、そのまま走ってしまっ
た。

外は雨。

目の前の運動場には、水溜りがたくさん出来ている。そこに、大粒
の雨が新たに落ちて、だんだんと大きな水溜りができてゆく。その
様子を、校舎の中からじっと眺めていた。

下校時間を過ぎた校庭には、誰もいなかった。何だかんだ言っても、
うちの高校はこの辺りの学区では一番優秀らしい。

陸上部が使う大きなトラックと砂場。校庭の隅にはテニスコートが
6面もあって、私達帰宅部からすれば、本当にこんなにたくさん使
うんだろつかと疑ってしまふ。そして、一番手前とその奥には対に
なったサッカーのゴール。筒井くんは、いつもここで練習するんだ
ろつか。そこまで考えたとき、何を思ったのか、この雨に打たれて
みたいと感じた。

一步、また一步雨の中へと足を踏み出す。ぱたりぱたりと頭上に落
ちる、雨粒が冷たい。その冷たさが芯まで通ってきたとき、ついさ
つき藤崎くんにフラれたときのことを思い出した。そう、雨に打た
れたときの冷たさは、あのひとことを聞いた瞬間の絶望と一致する。

ようやく後悔し始めた。

普段の私はおとなしい方だったから、筒井くんは驚いているだろう。
筒井くんだけじゃなく、男子と話すことの私。印象が薄かっただろ
うから、今日のことは簡単には忘れて貰えないかもしれない。いろ
んなことを考えても、やっぱり最後に行きつくのは 私が悪かつ
た。あんなこと、したらいけないかった そんな自己嫌悪。

くす、と小さな笑いが聞こえた。振り向く前に声がかかる。

「こんなところにいたんだ？」

筒井くん。あんなことをした手前、顔が見れない。

「さっきはごめん」

「あ、謝らなくちゃいけないのは、私の方だよ！」

思わず振り向いて叫んでしまった。

「あ……」

それが自分でもびっくりするほど、大音量だったんだから。

筒井くんも目が点になっていた。恥ずかしくって申し訳なくって、意味もなく顔が真っ赤になる。すると、筒井くんが急にお腹を押さえたんだ。

「ど、どうしたの？」

は、腹痛？

背中をさすってあげようと、手を伸ばしたら、筒井くんが震えだした。大声で笑いながら。

「え……？」

「み、水野さ……面白すぎ……ぶっ」

『ぶっ』って、筒井くん。もしかして、嘘ついたの？

「嘘だったなんて、ひどい！心配したのに！」

「……悪かったよ。だって今日の水野さん、いつもと違うからさ」

「それは……」

不自然に会話が止まってしまふ。筒井くんとの間に、重たい空気が流れた。

「……あ、あのね？」

不自然極まりないけれど、耐えられなくなって話しを変える。

「筒井くんはどうして、来てくれたの？」

「ちょっと心配になったんだよ。水野さんが、今にも消えそうな顔だったから」

そっか。

繕わない筒井くんの言葉が、今の私に一番優しいように思った。飾らないいつだって自然体の筒井くんが、羨ましいと思った。今日まで話したことない人なのに、素直に尊敬できる。

「ほら、今も雨に濡れてるし」

そう言つて、優しく微笑む。自然すぎて、思わず私も笑おうとした。すると、いきなり手を掴まれた。

「え？」

そのまま、ぐいっと手を引かれて、よろめいてしまふ。

「自暴自棄になって、雨に打たれようなんてダメだよ」

私には、返す言葉もなかった。

「それに」

「それに？」

「水野さん、俺に鞆投げただろ？」

だから、ハイ。そう言っただけで渡された私の鞆は、お、重い。

「筒井くん……あ、あの、私！　なんて謝ったら良いの……そ、そんな普通に渡されても……」

「大丈夫だって！　俺、サッカー部でゴールキーパーだし」

よしよしと撫でられると、なんだか鼻の奥がつんとした。やばい、また泣きそう……。

「泣きやむまで、付き合うよ」

「どうして？」

そんなに優しいの。言葉は最後まで続かなかった。

「見ちゃったお詫びかな？」

それでも、彼には通じているようだった。ちょっぴり申し訳なさそうな顔が面白くて、少しだけ笑ってしまう。

笑いながら、私は今日初めての涙を流していた。

「水野さんはさ、新しい恋をしたらいいと思う」

新しい、恋。

「きっと、幸せになれるよ」

ふと見上げれば、満面の笑み。

こんなに優しい笑顔ができる人なんて、彼以外にいない。

あ、どうしよう。

体中に張り付いた水分が、少し熱い。胸が、心臓が、心が　アツ
イ。

あたしはきつと、これが欲しかったんだ。

藤崎くんはいつだって優しくった。だけど、その優しさ、笑顔を私
に向けることはなくて。他人行儀な態度が、切なかつた。辛かつた
んだ。

涙は、いつのまにか止まっていた。外の天気も、気がつけば少しだ
け晴れていて。

今日の空は、私と気が合うみたい。

あんなに好きだった藤崎くん。憧れなんかじゃなかつた。それは今
でも言えること　本気だったのに。私は、私の想いは、変わって
しまった。

ひとつの恋は終わった。あまりにもあっけなく。
何にも進展しなかつたけど、悲しくない。

俯いた私を、泣いていると思って、撫でてくれる大きな手。
これって心変わりが早いのもかもしれない。また失恋してしまうかも。

だけど、感じたの。
今度こそ大丈夫って。

「さつきは、ごめんね？」

「いいよ。ま、俺としては、ごめんよりも、もっと違う言葉が欲しいけど？」

そう言つて微笑みかけられたとき。この人となら　　って、考えてしまった。

新しい恋なんていらない。だって、それはもう、目の前にある。こんなにも傍にあるから。

また片想いで終わっても、大人になって良い恋だと言えるだろう。素直にそう思えたんだよ。

「筒井くん、ありがとう」

ごめんのその先を、あなたは教えてくれたから。

（後書き）

この作品、どうでしたか？
批評、感想など、頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8121a/>

ごめんねのその先を

2011年1月15日22時13分発行